

# Lexicography より見たグ氏訳語

— 女真館来文の検討の一環として —

山 路 廣 明

## は し が き

いまさら改めてグルーベ氏の女真訳語を採り上げて云々するまでもないが、詳細にみれば、この訳語の中には研究の対照となる箇所がまだ残っている。この項は、同訳語中にある、いわゆる女真館来文の検討の一環として、lexicography の上から観察し、他版の女真訳語と比較して、その特徴を説明しながら女真語辞書のあり方を述べたもので、女真文字と契丹文字との比較、その製字方法論はすでに発表済みであるから、ここでは触れなかった。

この項で何故グルーベ氏（以下グ氏と略称する）の訳語を採り上げたかについては、女真訳語の中には原字を用いず、漢字による原語転写のもの、ローマ字索引のないものもあって、同

氏訳語はそれら他版の訳語に比し索引が詳しく加えられているからである。

## 本篇執筆上の参考文献

Wilhelm Grube: Die Sprache und Schrift der Jučen.  
Lpzg, 1896.

羅福成: 女真訳語 上下二卷  
東洋文庫蔵: 華夷訳語

女直館来文・本文 一卷

女直館来文・雑字 一卷

静嘉堂文庫蔵: 訳語

女直(訳語) 一卷

陶宗儀(明): 書史会要

北京大学国学季刊 第4卷第1号(1923)

Lexicography より見たグ氏訳語

## 1) 女真訳語の種類

女真訳語は華夷訳語：朝鮮，琉球，日本，安南，占城，暹羅，韃靼，畏兀兒，西番，回回，滿刺加，女直，百夷の13ヵ国語中の一書で，原字のあるものと原語を漢字で音写したものとがある。その種類は上述の参考文献の項に示した通りであるが，このほかに河内本，阿波本等があるといわれ，未見のもの以外は次の形式をとっている。

### 静嘉堂文庫所蔵本

訳語は全6巻あり，和装の毛筆写本で全44丁，第3巻が女直となっている。これもこの叢書の他の巻と同じく原字がなく，漢語・漢字音写，それに片仮名で発音が朱書してあり，ところどころ対応語として満字による満洲語が付されている。その内容の各門は，グ氏の訳語とは多少異なり，方隅門の代りに文史門があり，続添，新增がない。また女真館来文もない。

### 東洋文庫所蔵本

この訳語は女直館来文・本文，同雑字があるが，単語の部としては雑字だけで，雑字の内容は新增となっており，グ氏訳語にみる天文門から通用門に至る各門が欠けている。

これに対し，女直館来文本文の方は，グ氏訳語所載の20例よりも10例多く30を算え，いずれも漢訳が付されている。

### 羅氏訳語

上下二巻より成り，同氏の筆写を起版したもので，上巻は単語編，下巻は女直館来文の原字原文・漢文の対訳がある。上巻はグ氏訳語の各門と同一。下巻は前半の来文がグ氏訳語のそれと同一であるが，後半は東洋文庫本の来文其他が付加されている。

## 2) グ氏訳語について

グ氏訳語は女真訳語の筆写で，これにローマ字による各種の索引を施して出版したもので，その内容からいっても，訳語の部が原字による女真語，漢字による女真音の転写，漢訳による意味が記されている。これに対し，索引の部には，ローマ字を用いて女真語転写の漢字音を示し，また満洲語を併記して参考に供する等，多角的に女真文字の音の追究の資料を提供している。これは女真文字そのものの直接的な研究ではないにしても，間接的に，また異なった角度から女真文字の音あるいは読みを推定する上に大いに役立っている。その内容は次の如くである。

前言（文法略解）

女真訳語（女真語・漢字音転写・漢訳）

女真文字画引き索引

漢字音ローマ字引き索引（女真単字を対照）

漢字音ローマ字引き索引（女真単語を対照）

女真文20章(女真館來文) —ローマ字による漢字音の転写  
—漢訳—独訳

來文各章の注意(卷末)

これによってみるに、グ氏訳語の目的は、あらゆる面から女真文字の音を引き易くし、文書、金石文等の解説に資するための労作である。

### 3) 女真語辞書のあり方について

以上はグ氏訳語について概略述べたのであるが、これに関連して、女真語辞書としてはより一層の精密さが要求されるべきであり、その目的のためには、次のような項目が必要であろう。

- 1) 女真文字の画引き索引
- 2) 女真音(ローマ字)アルファベット順索引
- 3) 漢字音(ローマ字)引き索引(単字対照)
- 4) 漢字音(ローマ字)引き索引(単語対照)
- 5) 女真語分類項目(訳語式)

次に、上述の各索引についての実例を下に示すこととする。

- 1) [VI画] 有 baha [意](巴哈 pāh-hāh)  
有老 baha-mbi (巴哈別 pāh-hāh-piēh) 得る
- 2) Baha-mbi 有老(巴哈別 pāh-hāh-piēh) 得る
- 3) Pāh-hāh (巴哈) 有 baha
- 4) Pāh-hāh-piēh (巴哈別) 有老 baha-mbi 得る

Lexicography 女真語辞書編

### 5) 動詞

有老(巴哈別)得る

何故このように五種の索引が必要であるかといえば、それは、

イ) 女真文字には意字と音字とがあるが、それがすでに死字となり、したがってそれらの文字に与えられた正しい音は伝わっていない。

ロ) 当時の音が現在までに伝わっている他種の音字による転写が行なわれなかった——少なくとも今日までにそのような記録も現物も発見されていない。

ハ) ただ女真音とは不一致の漢字によ音訳のみが残されている。

故に吾人は、これを唯一の手掛りとして満洲語と対比し、その音価を推定するしかない。したがって女真文字に関する限り、漢字を介在しているために、漢字音から引き得る一個の女真意字 3) と、漢字音から引く全部の女真単語 4) と、単語の分類から引くもの 5) と、原字は字形が少なくとも1000近くあるから単純な(たとえばローマ字のような)排列に統一できないため、漢字のように画引きで引くもの 1) と、アルファベット辞書に倣ってローマ字化した女真語を引くもの 2) との5種が必要である。

このように多くの索引を作成しなければ、新しく目にふれた女真語の音(あるいは訓み)を発見するのに非常に手数がかか

るからである。

たとえば《有》の字を見てその訓みと意味とを知ろうとするときに字画でさがす 1), 次に女真語の baha-mbi の意味と文字とを知ろうとするときには 2) により, 《有》が漢字音 pāh-hāh であることがわかって、その本来の音(推定)と意味とを知りたいときには 3), 4) で, また他の例で, 「虎」を女真語文字で知りたいときには, 分類の項目 5) を利用すること等によって, いろいろな角度から女真語の音と意味とを知ることができるので, これらの索引ないし項目はそれぞれの特色をもち, それぞれの用途に応じて有意義である。

#### 4) グ氏訳語中の多種音の文字について

グ氏訳語の批判については, 安馬弥一郎氏の「女真訳語の研究」(未刊稿)があるそうである(同氏著女真文金石志稿及び京都・彙文堂店主故大島五郎氏談)が, それとは独立して, 拙著の第11章に, 「グルーベ氏女真訳語の検討」と題して述べておいたが, この項では, それとは別な面から多種音の文字について検討してみたい。

女真文字は元来一字一種音(または訓み)主義であるが, グ氏訳語 II. (p. 46~79) の中でしばしばみる二種音以上のものがあり得るはずがない。それは女真文字の訓みが統一された方針で作られたからであり, このような誤差の生じるのは,

(1)漢字音写という現象が生んだずれと, (2)類字の二文字を一文字とみた誤りのためである。その著しい例を示せば次の通りである。

この項では便宜上女真原字は省略し, 訳語 II. (p. 46~79) にある原字に冠した数字を以て代用した)

36. póh, 伯 62, 223, 271, 337, 341, 393, 477, 479, 487,  
506, 697, 748, 762, 778, 801, 827, 843

tih, 的 785

この字は訳語中で使用頻度が18で, うち póh (伯) が17例, tih (的) が1例である。満洲語では ti > ci, di > ji となる。62. と 785. とを比較するに, 音写漢字では 62. においては住兀伯(道)となり, 785. においては同一文字が住兀的で音写されている。これよりみて, tih (的) は póh (伯) の誤りであると判断される。

52. pèn, 本 207, 247, 248, 257, 378, 379, 424, 441,  
579, 604

pú, 步 422

この字も訳語に二様の訓みが与えられているが, おそらくこの両者は別個の類似文字であろう。

71. 'á, 阿 41, 119, 209, 349, 698, 703  
hāh, 哈 497

7例中, hāh (哈) は1例であり, 119. の例からは

'á (阿) が正しく、497. の例においても、満洲語との対比により 'á (阿) であろうと思う。

73. 'óh, 厄 276

wòh [wáh], 韓 732, 764

wúh, 兀 113

hēi-léh, 黑勒 35, 36

hūh, 忽 733

tū, 都 551, 554

この字は6通りに訓まれているが、このいずれが正しいかは問題が残る。

82. múh-t'áh, 木塔 378, 379

fēi, 肥 500

この字を、グ氏は81. に fēi (肥), 82. に múh-t'áh と二様に分け、字形もわずかな点で区別しているが、類似のものであるとみれば、前者は fei であり、後者は mita あるいは muta であろう。

98. hūng, 洪 22, 30, 98, 183, 406, 450, 529, 539, 549, 557, 672, 673, 693, 694, 708, 720, 721, 725, 736, 764, 846

šān, 珊 586

この字にも二様の訓みが与えられているが、hūng は語尾の -hun であり、女真語では漢字音の転写にはもちろん、漢字からの製字においても -ng と -n

とは同一視される。šān はまったく漢語であるから、hūng および šān を表わす文字も別々の類似形であることが推察される。

102. hàn, 罕 143

'án, 岸 64, 72, 187, 780

pān, 班 29

pō, 彼 510

lâh, 刺 239, 668, 803

この字には5通りの写音が示されているが、143の委罕は、原字によれば i-han ではなく iha-an > ihan であるから、hàn は an であるべきで、次の 'án と同化する。また29. の pān は、原字通りでは an-pan ではなく amba-an であるから、これも 'án と同化する。また510. の pō は kih-pō-kih ではなく原字通りでは gira-an-gi であるから、これも 'án に同化する。さらに lâh (刺) については、239. の例では múh-lâh となっているが、原字からは mula-an > mulan であるから、これも 'án と同化し、668. および 803. においては 'án-pān-lâh と転写されているが、原字からは amba-an > amban で、iâh (刺) に相当する原字を欠いている。それ故に、ここでも lâh は an でなければならぬ。したがって上の5例はいずれも an に統一される。

104. yīn, 因 39, 50, 80, 99, 100, 233, 432, 479, 580,  
581, 696, 741, 776, 806, 823, 825, 867  
lín, 林 138, 168, 170, 171, 174  
shēn, 申 710, 738, 739  
kū, 庫 242

この字の4種の訓みのうち、yīn を表わす例が大部分を占め、lín (林) を表わす 138, 168, 170, 171, 174 はいずれも母林 (mu-lin) となっている。しかしこれを原字に即してみるならば、mori-in > morin であるから、lín (林) は yīn (因) と同化する、710, 738, 739 はいずれも 'óh-shēn (厄申) であり、グ氏もこの語に対応する満洲語を示していないが、おそらくは原字から推して eši-in > ešin と仮定すれば、語尾へ来る音は shēn ではなく in のはずである。次に 242. は h'ú (庫) となっているが、原字は 39. の阿里因と同一形である。グ氏は 242. の語に満洲語の alikô を挙げており、これは正しいと思われるから、この 242. の例に限り yīn (因) とは異なった類似の文字であると思う。

141. t'ih-huô, 替和 161  
'óh-t'ūh, 厄禿 846

この字は異なった2例しかない。前者は čiho あるいは čoho, 後者は etu- である。これより推して、

この字はおそらく相似の別字であると思う。

145. šáng, 上 13, 134, 190, 269, 578, 619, 630, 634  
sāh, 撒 353, 723, 738, 812

この字には相似た音の2種の音訳が施されているが、13. から 634. までの8例は、いずれも「白」を意味する šáng-kiāng (上江) である、そして原字から考えれば、この字は音は šan であり šang ではない。しかし sāh (撒) の例のうち、723. のみは他と例を異にし、グ氏は対応の満洲語として sabdambi を挙げているから、この例から sab となり、他の例はいずれも sāh (撒) である。ここに šan, sab, ša の3音から不一致の現象が考えられ、より正確な訓みの推定は困難である。

164. t'óh, 脱 356  
t'āng-kù, 湯古 663

この字は異なった訓みの2例があるのみであり、それぞれ満洲語との対応により根拠のあるところから、おそらく両者は異なった類形の文字であろうと想像される。

169. wēn, 温 5, 10, 19, 20, 27, 29, 101, 155, 185,  
189, 255, 286, 287, 290, 291, 348, 358, 433,  
465, 564, 568, 569, 570, 577, 587, 634, 635,  
752, 828

lún, 倫 32, 274, 760

この字には2種の例があり、wēn の例が圧倒的に多く、これは語尾の -un を示している。漢字には un の音がないから、近似の wēn の音を有する文字を借用しているにすぎない。次の lún は 32, 274, 760. 共に同一語国倫 (kuo-lún) を示しており、原字に即してみれば guru-un > gurun であるから、lún (倫) は -un に同化する。それ故に、この字の音は -un でなければならない。

208. lù, 魯 453

sú-lù 素魯 566

この字も2様の音が示されているが、453. にも忽素魯となっており、素魯がみうけられる。また忽に相当する原字は 673. 兀魯忽洪にあり、もしこの字が、グ氏が 208. に示した如く魯であるならば、当然 673. も兀魯忽素洪とはならない。したがってこれより推せば、208. の原字は sur であろうと思う。

292. múh-lù 木魯(?) 599, 614, 868

ših-rh, 失兒 818

この字にも2種の訓みが示されているが、前者の3例は同一語で、もし múh-lù を対応の満洲語の mar と同一音とみれば、次例 818. の語には適用できない。

い。したがってこの両者はそれぞれ別字であると判断すべきではなかろうか。

311. wôh [wáh], 鞞 34, 701, 745, 783, 795

hwô-tih-wôh [wáh], 和的鞞 289

この字にも2種の訓みが与えられているが、前者から推して語尾の -on である。漢字には on の音を有するものがないから、近似音の wôh を以て音訳に用いた。次の 289. の語は、写字の折りに hojiho に相当する語を落としたために、この字1字で示されているが、これは誤りで、この字は前者同様 -on を表わす語尾である。

322. 'ān, 安 29

'ān-pān, 安班 668, 724, 803

この字はわずか4例に過ぎないが、29, 668, 803. は原字が同じで、29 だけ安班となり、668, 724, 803 は安班刺となっている。これは原字から amba-an > amban であり、さらに 724. は amba-la であるから、この字の読みは amba でなければならない。したがって 668, 803 の音写安班刺は安班の誤りである。なお 322. の原字は訳語中の原字と異なるが、訳語中のものが正しい字体である。(前出102 参照)

352. kīh, 吉 6, 9, 14, 17, 18, 65, 134, 449, 512, 524,

526, 532, 630, 771

kēng, 更 328, 408

この字は原字により kih (吉) > gi である。しかし後者の2例を見ると、328, 408 も共に同一語で塞更革となっている。しかしその訳は、328. は親戚で、408. は孝となっている。グ氏は328. に対応の満洲語 senggime を挙げているが、512. には3字の原字中、最初の2字で血の意味を示し、音写も塞古としているから、おそらく、この字はやはり gi で、kēng (更) は誤りであると思う。

386. k'ù, 苦 376, 377, 790

tū-mân, 都蛮(?) 455, 484

kih. 吉 833

この字には3種の訓みが与えられているが、うちkuだけが認められて、他の音はこの字とどのような関係にあるか、なお疑問である。

560. ni, 你 32, 33, 34, 272, 274, 331, 758, 760, 792, 793, 801, 851, 853, 863

t'ūh, 禿 231

この字にも2様の訓みが示されているが、前者は明らかに名詞の所有格を示す助詞の ni である。また後者は対応語との比較により、tu の音が認められるから、おそらく前者 ni] とは別の類似の文字であ

ろう。

616. lào, 老 142

hūh-t'ūh, 忽秃 258, 343, 803

この2例は、原字と対応語からそれぞれ lo, hutu の訓みが認められるので、各々類似形の別字であると考えられる。

651. t'áh, 塔 268

pùh-tū 卜都 523

この字は2種2例にしかすぎない。それぞれ原字と対応語との比較により、前者は ta, 後者は buda なる訓みが認められる。元来それぞれ異なる文字であったものが、字形が類似しているため、写字の際に誤って同一文字にしたのであろう。なお ta と似た文字としては、訳語 229. の最初の字がある。

以上は、二つ以上の訓みの差の著しいもの20種を採り、聊か検討を加えてみたものである。

(注意) 本項では二種の女真数字を除く以外は原字を挙げる代りに全部数字を用い、一般の方々には甚だ抽象的で読みにくいと思われるが、原字に関してはグ氏訳語原本あるいは複製本を参照されたい。

## 付1 女真文字に関する紹介文献

- 石田幹之助「女真語の研究資料について」(東亞 3巻3号 昭和5年3月)
- 八木奘三郎「金の得勝陀碑」(満洲旧蹟志 下 大正15年)
- 園田一亀「大金得勝陀頌碑に就て」(満蒙 昭和8年12月号)
- 山下泰蔵「新女真国書碑に就て」(満蒙 昭和9年9月号)
- 同 「金鏡女真文字資料の一として」(満洲史学・3の2)
- 田村実造「女真文字」(東洋歴史大辞典 4 p. 420)
- 同 「契丹・女真・西夏の文字」(平凡社・書道全集15 昭和29年)
- 及川儀右衛門「女真文字」(満洲通史 昭和10年)
- 毛 汝「女真文字之起源」(史学年報 第1巻第3期 民国20年8月)
- 小平綾方「遼・金・西夏・元・清五朝の製字」(東洋文化 第154号, 昭和12年7月)
- 小倉進平「朝鮮に於ける契丹及び女真語学」(歴史地理 第29巻第5号 大正6年5月)
- 白鳥庫吉「契丹女真西夏文字考」(史学雑誌 9巻11, 12号 明治31年)
- 斉藤武一「契丹文字と女真文字」(国立中央博物館時報 第

11号 康德8年5月)

- 羅福頤「遼金文字僅存録」(同上 第13号 康德8年9月)
- 島山喜一「満鮮文化史観」(昭和18年)
- 宋史提要編纂協力委員会(東洋文庫内)「宋代研究文献提要」(昭和36年)

## 付2 女真語・文字に関する研究論文

- 石田幹之助「女真語研究の新資料」(桑原博士還暦紀念東洋史論叢 昭和6年)
- 渡辺薫太郎「女真館来文通解」(亜細亞研究 第11号)
- 同 「女真語の新研究」(同上第12号)
- 稲葉岩吉「北青城串山城女真摩崖考釈」(青丘学叢 第2号 昭和5年11月)
- 同 「吾妻鏡女直字の新研究」(青丘学叢 第9号 昭和7年8月)
- 羅福成「宴台金源国書碑積文」(考古 第5号)
- 同 「宴台金源国書碑攷」(支那学 第3巻第10号)
- 同 「女真国書碑考釈」(支那学 第5巻第4号)
- 同 「女真国書碑跋尾」(国立北京図書館月刊 3の4)
- 同 「金泰和題名残石」(東北叢刊 17)
- 同 「明双児干永寧寺碑女真国書積」(満洲学报 第5号)
- 羅福頤「遼金三石刻考, 金奥屯良弼題名」(満洲史学 3の2)

- 劉師陸「女真字碑攷」(考古 五期 昭和11年12月)
- 安馬弥一郎「女真文金石志稿」(京都 昭和18年3月)
- 村山七郎「吾妻鏡に見える女真語について」(東洋学報 第33卷3・4号 昭和26年10月)
- 山本 守「静嘉堂本女真訳語攷異」(書香 第16卷第10号 昭和18年)
- 山本 守「女真訳語の研究」(神戸外大 論叢 第2卷第2号 昭和26年7月)
- 長田夏樹「満洲語と女真語」(神戸言語学会 1949年5月21日)
- 同 「女真文字の構造とその音価に就いて」(日本中国学会1949年10月23日)
- 同 「女真文字金石資料とその解説に就いて」(ウラル・アルタイ学会 1950年7月9日)
- 閔泳珪「女真文字의 構成에 對하여」(釜山・延禧大学 史学会 第9回月例研究発表회에서 韓国4285年7月19日)
- 山路広明「女真説文考」(言語集録 第1, 2, 3, 4, 5号)
- 同 「女真語の十二支」(言語集録 第2号 1952年7月)
- 同 「女真語に於ける完全意字と不完全意字」(言語集録 第2号)
- 同 「女真語の十干」(言語集録 第3号 1952年9月)
- 同 「契丹・女真製字方法論の比較」(言語集録 第4号 1953年)
- 同 「女真文字の構造」(言語集録 第4号)
- 同 「女真製字に於ける加点の研究」(言語集録 第5号 1953年)
- 同 「女真難語解一來(都督)の基字発見について」(同上)
- 同 「グ氏訳語の検討」(同上)
- 同 「女真語解」A Jučen-Japanese-English glossary 1958年
- 同 「女真文字の製字に関する研究」1958年